

プロフェッショナリズムの養成

薬学教育モデルコアカリキュラムにおいてプロフェッショナリズムとは「豊かな人間性と生命の尊厳に関する深い認識をもち、薬剤師としての人の健康の維持・増進に貢献する使命感と責任感、患者・生活者の権利を尊重して利益を守る倫理観を持ち、利他的な態度で生活と命を最優先する医療・福祉・公衆衛生を実現する態度」と記載されている。すなわち、薬剤師として医療の一端を担うためには、高い倫理観と使命感、責任感をもち、患者のアウトカムを改善させるための知識・技能習得のための生涯研鑽が必要になる。そこで、具体的に身につけるべき内容について以下に示す。

1-1. 常に医療人としてのふさわしい、身だしなみ、言葉遣い、挨拶ができる

患者のみならず病院内外のスタッフに対しては、挨拶を励行する。さらに医療者として適切な身だしなみを整える必要がある。患者からみて華美な服装や装飾は、医療者としての信頼感を損なうので厳に慎むべきである。また、患者の中には治療による嘔気・嘔吐症状が強い場合もあり、香水などの不必要な匂いは患者にとって悪影響を与える可能性があるため、慎む必要がある。このように、薬剤師は病院の中外のスタッフや患者から信頼され、その職責を正しく果たすために、適切な身だしなみ、態度を取る必要がある。

1-2. 様々な立場を理解し、責任のある行動をとることができる

病院の中では多くの医療スタッフが同じ目標を持ってそれぞれの職責を果たしている。また薬剤部（薬剤科）の中でも薬剤部長をトップとした組織のなかで業務を行うことになる。このように、我々は一人で仕事をしているのではなく、組織で仕事をしているのである。そのことを自覚し、独善的な行動を取るのではなく、病院としてのチーム、そして薬剤部としてのチームの両方の一員であることを意識し、行動する必要がある。そのためには、組織内には様々な立場の人がいることを理解し、他人への尊敬と思いやりを持って行動することが求められる。

1-3. 患者や同僚のスタッフ、他の医療スタッフに敬意をもって接することができる

病院内には医師や看護師、清掃員や警備員など様々な医療スタッフが働いている。全てのスタッフに上下関係はなく、薬剤師だから他の医療スタッフよりも立場が高いということは一切ない。他の医療スタッフの仕事には尊敬の念を忘れることなく、敬意を持って接することが重要である。

1-4. 指導者や同僚のスタッフ、他の医療スタッフに対する報告、連絡、相談を行う

仕事をするにあたって、様々な問題が降りかかってくる。その時は指導者から指導を受けることがある。指導を受けるにあたり、指導者に対して報告・連絡・相談を適宜行うことが

求められる。

- ・報告: タスクや業務の担当者がその経過や結果などを述べること。進捗報告。
- ・連絡: 仕事の情報や予定を関係者に知らせること。
- ・相談: 問題解決や意見交換のために他人の意見、アドバイスを聞いたり、話し合ったりすること。

報告、連絡、相談を行うことで、問題解決を早くすることが可能になり、部署内のミスが減ると言われている。さらに指導者にとっては詳細に現状を把握することができ、部署内の業務効率が向上する。また、指導者と綿密にコミュニケーションをとることで、互いの理解に繋がる。初めての組織では不慣れな仕事が多く、「分かったつもり」で仕事をする大きな事故に繋がる可能性がある。適切な指導者とのコミュニケーションを取ることが求められる。

1-5. 病院で定められている医療安全のルールを理解し、それに基づいて行動できる

いくら注意を払っても人は必ずミスをする生き物である。そのため、ミスをする前提で業務システムを構築する必要がある。病院内では、医療安全のマネジメントを司る部署があり、院内の様々な医療安全上の問題を扱っている。薬剤師が知っておかなくてはならない基本的な医療安全のルールを以下に示す。

・インシデント

医療の過程において、エラーが発生したか、あるいはエラー発生前に患者に障害を及ぼすことなく、医療事故には至らなかった事例を指す。薬剤師で関連する例では、調剤時の取りそりえ間違い、患者への交付間違い、持参薬入力の間違い、無菌調製間違いなどが当たる。調剤時など、薬剤師業務中に起こったインシデントは必ず医療安全を司る部署に報告し、改善策を講じる必要があるかを議論することが求められる。インシデントは「罰則」ではなく、業務改善のためのヒントであると意識することが大切である。インシデントの発覚を恐れ隠蔽することは、更なる大事故に繋がる。インシデントは隠蔽せず、更なる大事故を未然に予防するためにも、発覚すると速やかに指導者に相談をしなくてはならない。

・適応外、未承認使用

近年、医薬品の適応外、未承認使用による医薬品関連死亡事故が報告されている。薬剤師は適切な薬物療法を提供するために、今使用している薬剤が適応にあった薬剤かどうかを判断することが求められる。医薬品の適応外、未承認使用は必ず院内で適切な許可を得たうえで使用しなくてはならない。適応外使用、未承認使用の把握は薬剤師にとって必須の業務であり、それを発見した場合は、指導者や医療安全を司る部署に適切に報告しなくてはならない。

これら以外にも病院内の医療安全を守るために様々なルールが定められている。それらルールには必ず目を通し、不明な点がある場合は自己で判断せず、必ず指導者に相談する。

1-6. 病院で定められている感染対策のルールを理解し、それに基づいて行動できる

新型コロナウイルス感染症のパンデミック以来、院内でのマスク着用を含めた感染対策が進むようになった。しかし、病院内での感染症はウイルス感染だけではない。薬剤師は病院で業務を行う以上、病院内での感染対策のルールを遵守する必要がある。薬剤師が知っておかなくてはならない基本的な感染対策のルールを以下に示す。

・手指衛生の励行

病院内は MRSA や ESBL 産生菌などの薬剤耐性菌が定着していることがあり、自身がベクターとなって薬剤耐性菌を患者に伝播させてしまう恐れがある。患者に触れる前や触れた後には必ずアルコール製剤での手指衛生を行う必要がある。一方で、薬剤耐性菌を保菌している患者からの菌の伝播もあり得るため、そのような患者の持参薬鑑別時は適切な感染予防策を実施する。

・針刺し事故時の対応

薬剤師が患者の血液が付着した注射針を用いて指先に誤って指すことは稀だが、医師や看護師はその頻度が高い。そのため、院内では、針刺し事故時の対応マニュアルがある。薬物療法が必要な場合もあるため、薬剤師はそのマニュアルを理解し、対応法を知っておく必要がある。

これら以外にも病院内の感染対策を進めるために様々なルールが定められている。それらルールには必ず目を通し、不明な点がある場合は自己で判断せず、必ず指導者に相談する。

1-7. 災害発生時に適切な対応ができる

災害時は平時の医療が提供できなくなる異常事態である。また、交通網が分断されると医薬品の供給が滞り、医薬品の提供も困難になる。さらに被災地では医療資源の枯渇により他地域への患者搬送も行われる。このように、災害発生時は医療機関の薬剤師が果たすべき役割は多岐にわたる一方で、その活動内容は被災の状況により大きく異なる。山口県の災害発生時の特徴を理解し、どのような事前備えが必要かを把握しておくことが望まれる。さらに、救急救命手法・技術の習得も必要である。

さらに、被災地に対して DMAT や JMAT といった医療チームが現地に派遣される場合がある。そのなかで薬剤師は、ロジスティクスの役割だけでなく被災地での調剤および医薬品の管理も行わなくてはならない。そのため、停電や断水時に備えた調剤の訓練も必要である。

1-8. 薬剤師が関与する診療報酬制度に立脚した業務を実施する

薬剤師の業務には診療報酬が付いているものがある。薬剤師はその算定要件を知り、適切な業務を行わなくてはならない。要件を遵守していないにもかかわらず、診療報酬を請求した場合は不正請求が疑われ、返還しなくてはならない場合もある。薬剤師が関与する代表的な診療報酬には「薬剤管理指導料」と「病棟薬剤業務実施加算」がある。それぞれの算定要件は厚生労働省のホームページを参照すること。特に病棟での業務を行う場合は、日本病院薬剤師会が発出している「薬剤師の病棟業務の進め方」の最新版を参照すること。

また、チーム医療が推進され、院内の様々な医療チームに薬剤師が参画するようになった。そのチーム活動においても診療報酬が付いている可能性がある。そのため、チーム医療に参画する薬剤師はそのチーム活動で算定する診療報酬の算定要件を理解し、算定要件を遵守した活動が求められる。

1-9. 患者情報を適切に取り扱うことができる

近年の SNS の普及もあり、個人が容易に情報発信できるようになった。しかし、現在も SNS 上で薬剤師による不適切な情報発信が問題となっており、SNS に発信する内容については改めて注意する必要がある。業務に関する内容は SNS で発信してはいけない。具体的には、患者の処方箋を写真でアップロードしてはいけない、患者面談時の情報を SNS 上で流してはいけない等が該当する。また、電子カルテをハードコピーした印刷物をトイレに忘れるなどの「うっかり情報漏えい」もあり得るため、薬剤師は患者の個人情報に常に気を付けていることを忘れてはいけない。

また、電子カルテを使用する場合は、USB メモリなど外部デバイスを無許可で使用してはいけない。ランサムウェアによるウイルス被害により、長期間病院機能が停止した事例が複数報告されている。病院情報システムの使用ルールを厳守することが求められる。

1-10. 常に新しい情報を収集し、活用している

医療の情報は常にアップデートされ、新しい治療が患者に提供される。薬剤においても新しい作用機序を持つ薬剤が連日のように薬価収載されている。そのため薬剤師は、常に新しい情報を収集するアンテナを張る必要がある。そして院内で使用可能になった新規採用薬剤においては、その添付文書は必ず目を通す必要がある。日々の情報のアップデートには様々な医療サイトや SNS が参考になる。しかし、SNS を含めたインターネット上では間違った情報も氾濫しており、手に入れた情報のみで判断をするのは危険な場合がある。信頼できる情報発信源から発信される情報を収集し、自己で評価できるリテラシーが求められる。

もし最新の論文情報を収集する場合は、Pubmed (<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/>) でキーワードを登録しておき、そのキーワードを含む論文が発出された場合はアラートを送信する無料サービスも活用するとよい。

1-11. 業務上の問題点の把握に努めている

1-12. 業務上の問題点に対して改善案の立案に努めている

業務のプロセスは常に改善が必要であり、そのためには、日頃の業務を通して業務上の問題点を抽出することが求められる。そのため、現在の業務で足りない点、不十分な点がないかを意識して業務を行う必要がある。業務改善が必要だと判断した場合は、必ず指導者に相談し、改善策を立案する。業務プロセスを変更する場合は、必ず部内全体で共有する。

また、他施設の取組みなどを聞くことで、自施設の業務内容に足りていない視点を得ることもある。院外の勉強会や学会などに積極的に参加し、院外の情報を収集することは、自施設の業務改善に有効である。

1-13. 生涯にわたって共に学ぶ姿勢でいる

前述の通り、医療技術の進化は日進月歩であり、我々は生涯にわたり学ぶ姿勢が求められる。生涯学習と言われるこの姿勢は、薬剤師としてのキャリアを考える上でも重要である。薬剤師は自分の将来像を思い描き、その目標に向かって研鑽を積む必要がある。例えば、薬剤師には様々な認定・専門制度があり、その資格取得を目標にすることも、自身のキャリアデザインを考えるうえで重要である。さらには、社会人大学院に入学し、研究指導者の下で研究活動を行うことも有益である。自身がどのような薬剤師になりたいか、そのためには何をすべきかを意識し、ゴールから逆算するように現在やるべき学習内容を決めると良い。

1-14. 研究マインドをもち、リサーチクエスチョンを立案し、解決のための研究を実施できる

薬剤師に求められるスキルは薬物療法の知識だけではない。医療はサイエンスに基づき実行されているため、医療を深く理解するためには、論理的思考が求められる。論理的思考は研究活動を通して身につくものである。

我々がマネジメントする薬物療法は未だ明らかになっていないことが存在する状態で行われているものが多い。例えば、「どのような患者で効果が得られるのか、副作用が起きるのか」、「この治療法は有効なのか」といった内容がこれに当たる。さらに我々の業務にも研究の視点をを用いることができる。例えば、「自分が行った取組みは患者のアウトカムを改善させているのか」、「自分の提案は正しいのか」と言った内容である。このような業務上で気になった疑問を「クリニカルクエスチョン」と呼ぶ。クリニカルクエスチョンをさらに研究仮説に落とし込んだものが「リサーチクエスチョン」と呼ばれる。我々が行う医療を更に良くするためには、薬剤師自身が研究マインドを持ち、業務の中からクリニカルクエスチョンを生み出すことが求められる。

しかし、リサーチクエスチョンが立案できるだけでは解決にならない。リサーチクエスチョンに基づく疑問を明らかにし、解答を得ることが重要である。臨床から得られるデータを用いた一般的な研究では、統計的手法を用いてA群とB群のアウトカムを比較することで、

リサーチクエスションの解答を得ることが多い。そのため、臨床上の疑問点（＝クリニカルクエスション）の解答を自分で得るためには、統計手法を学ぶ必要がある。

研究により得られた結果は、積極的に院外に発信すべきである。それにより、同じ医療を受ける他の患者のアウトカムも改善させることが可能になる。研究成果の発信は学会での発表と論文での発表に大別される。学会での発表はハードルが低いかもしれないが、特定の人にのみしか情報を伝達できないというデメリットもある。そのため、広く院外へ発信するためには論文としてまとめ、学術誌に掲載されることが望ましい。専門薬剤師取得には学術誌への論文掲載も取得要件になっていることが多いため、専門薬剤師取得を目指す場合は、論文投稿を目標に研究を開始しなくてはならない。